

サイエンティフィック・システム研究会(2016)
パネルディスカッション

AI時代の文理融合：
人文・社会科学にコンピュータ革命がもたすもの

コーディネータ：出口光一郎(東北大学)

パネラーの方々

- 今田 高俊 東京工業大学名誉教授
- 遠藤 薫 学習院大学法学部 教授
- 出口 弘 東京工業大学 情報理工学院 教授
- 前野 隆司 慶應義塾大学大学院
システムデザイン・マネジメント研究科 教授

パネル討論のねらい

- 本研究会のテーマは、「**コンピュータは人間を超えられるか？**」
- 自然科学・人文科学の両視点からの「**科学の営み**」と**コンピュータの関わり合い**について考察する機会としたい。
- 今回、パネラーは、いわば「ひとり文理融合」(すなわち、文と理のテイストを併せ持っておられる)の方々である。

を生かして、「**AI時代の文理融合**」を考えたい。

「文理融合」に以下のような観点を持ち込んでみました。

- (1)そもそも、文と理を分けているものは何か？
- (2)おそらく、文理ともに科学というものは、もとは、対象をじっくり観察しその裏にある原理のようなものを見極めようとした。
- (3)あるとき、ちょっと対象に「**ちょっかい**」を出してみると、思いのほか対象がその裏事情を「**白状**」することが分かった。
← ここで、**実験**という手法が科学において成立？
- (4)ある領域に対しては、この白状させるというやり方が(うまく手順を工夫すると)かなりうまくいくということで、だんだん実験の手が込んできて、その領域ではどんどん新しい原理が分かってくる。
- (5)一方で、やはりじっくり観察をするということを基本にする(せざるを得ない)領域も厳然として存在する。

「文理融合」に以下のような観点をもち込んでみました。

(6)ということで、おそらく、この後者と前者で、**文**、**理**と分かれて行った(か?)

(7)しかし、コンピュータシミュレーションに始まり、AIの時代を迎えると、「**文**における**実験**」というものが、これまでの**文**での方法論や、また、**理**での**実験**とも違ったやり方で有効になってくるのではないか。

(8)さらに、ビッグデータが絡んで、いわゆる「フレーム」が**文**でも設定可能になる、

(9)その先に行きつくところは、文理の融合なのか、新しい**文**の形なのか、理をも巻き込んだの新しい科学の形なのか。

論点は(おそらく)次の3つ

- AIは、人や社会を「より深く観察する」道具になるか。
- AIは、人文・社会科学における「実験」(手法、フレームの両面で)の形を変えるか。
- その結果、新しい文理融合の形態が生まれるのか。

AIが、文、特に人間や社会を対象にした科学の手法を変えていくのか、その結果としての「文理融合」とはどのようなことになるのだろうか

- AIが、いわゆる「身体性」を持つことは、かなり難しそうです。
- その意味で、心理物理実験の領域まで入っていけるのかわかりません。
- また、AIを束として、社会学の領域にまで拡張していけるのかも、興味ある議論ができそうです。
- AIは感情を持てるかとか、AIではできない人間の特性は、などのAIの限界の線引きを探る(そして、安心をする)議論はたくさんあるのですが、学術の領域をここまで広げられる、という議論があまりないので、特に、理系のテイストを持ちながら社会学や人間学に精通した皆様の討論を期待しました。